

2016年11月6日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 4章 23～31節

説教：神のことばを語らせてください

あらすじ

生まれつき足に障害を持っていた男がパウロに施しを求めたとき、パウロが「イエス・キリストの名によって歩きなさい」と語ります。すると男はすぐに立ち上がり歩き始めました。集まって来た群衆を前にして、ペテロはなぜこのような事が起きたのかを説明し、そこからイエス・キリストの死とよみがえりを証ししていきます。ところがそこへ宮を管理している祭司たちがやってきて、ペテロといっしょにいたヨハネを逮捕してしまいます。ペテロがこう語ったからです。「指導者である祭司たちや律法学者たちは、キリストと呼ばれる神から遣わされた方を十字架で殺した。」この言葉が当局の神経を逆なでしてしまいました。彼らは、「今後いっさいイエスの名前をかたってはならない」と脅してふたりを釈放することにしました。

ペテロがもう少し場所をわきまえてもっと配慮していたらこんなことにならなかった。そんな声が聞こえてきそうです。でも今日の箇所を見ると、そんな消極的な意見はどこにも出て来ません。もっと大胆に語らせてくださいと祈っています。なぜ、彼らはそう祈ったのか。そのことを見ていきます。

1 仲間たち

1) ペテロの説教で救われた人たち

釈放されたふたりはすぐに仲間の所に行って、一部始終を報告しました。この仲間とはだれのことか。使徒と呼ばれる人たちが中心にはいますが、ペンテコステの日に聖霊

がくだり、三千人の人が救われ教会のメンバーはじょじょに増え始めています。このようにして最初のキリスト教会がスタートします。まだきちんとした組織もできていないのに、このとき教会ではペテロとヨハネことを心配しながらずっと祈っていたようです。

ふたりはそんな仲間たちの所へ戻り、自分たちがどのような脅迫を受けたのかを詳しく報告しました。聞いていた人たちは動揺したと思います。今度は自分が脅迫されるかもしれないのです。皆さんならどうするでしょうか。目立たないようにしようとか、隠れクリスチャンになろう、そんなことを考える方もいるかもしれません。では初代教会の人たちはどのような選択をしたのでしょうか。

2) ペテロが語ったこと

24節前半。「これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。」

「心を一つにして」ということばに目が留まります。救われてまだ問もなかった人たちですから、普通ならばばらばらになりがちです。それなのに同じ思いをもって祈りをともにしたということに少なからず驚きます。なぜ彼らが心を一つにできたのかを考えます。

鍵は、エルサレムで始まった最初の教会に集まった人たちが、どんなことばを聞いて救われたのかにあると思います。ペテロはこう語っていました。3章 17節後半から 19節。「あなたがたは、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行いをしたの

です。しかし、神は、すべての預言者たちの口を通して、キリストの受難をあらかじめ語っておられたことを、このように実現されました。そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」

ペテロは二つのことを語っています。一つ目。「あのような行い」とは、いのちの君であるイエス・キリストを殺したことを指します。あなたがたはキリストを殺した。旧約聖書で預言者たちがあらかじめ語っていたとおりに、キリストは十字架で苦しめられた。二つ目は、だからあなたがたは悔い改めて救われなさい。このペテロのことばで心が刺されて神に立ち返った。そんな人たちが大勢教会に集まります。まだ信仰者として生まれたてのほやほやで、ほとんど訓練を受けていない。普通なら混乱してばらばらになってしまうところですが、一つになって祈ることができたのは、このことがあったからでした。

このことに関連してですが、ときどき他の教会の方の話ですが、「教会が一つとなるためにはどうしたらいいでしょうか」という話を聞くことがあります。質問する方も、質問される方にも、何か特別な訓練や学びをすれば一つになれる、そういう思い込みがどこかにあります。

しかし聖書を読むと、実は非常にシンプルなかもしれません。私たちがすることは、ペテロが語った二つのことを自分のこととして受け入れるだけ。そうしたら私たちは自然に一つとされていく。神が建ててくださる教会とはそのような場所なのだ、聖書から教えられていきます。

2 祈り

1) 旧約の預言と事実起きたこと

では次に彼らが祈った祈りの中身を見ていきます。まず25節後半から26節。「なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。」

これは詩篇2篇の1、2節からの引用です。どうしてわざわざ旧約聖書を引用するのでしょうか。先ほど、ペテロが語ったことを思いだしてください。その一つ目では、旧約の預言者たちのみことばどおりのことが十字架で実現したと語っていた。では、いったい旧約聖書のどこに十字架のことが書かれているのか。確かめるために詩篇を開いた。そこに書かれているみことばと事実とを照らし合わせてみた。そうしたら全部一致した。それが27、28節の祈りです。

イスラエルの人たちは、子どものときから旧約聖書を学び、預言者たちのことばを暗唱できるほど知っています。それは頭だけの知識と言っていいでしょう。ところが、数ヶ月前、エルサレムの町中が大騒ぎになったあの十字架の出来事。あれは預言者がすでに語っていたことであった。そのことがわかったとき、これはもう頭の知識とか他人事ではなくなった。自分の問題になってしまう。どう考えても、自分はキリストを十字架にかけて殺した者である。その事実から逃れられない。そのことを認めた人たちは、神に立ち返っていきました。

2) なぜ聖書を信じるのか

いまさらこんな質問をするのはどうかと思うのですが、なぜ初代教会の人たちも、私たちも聖書を信じるのでしょうか。聖書に書

かれていることが真実であるから。そう答えるでしょう。では、なぜ聖書のみことばは真実であると言えるのか。考えたことがあるでしょうか。

じゃんけんの例を挙げるとわかりやすい。じゃんけんをするとき先出しする人はいません。そんなことをしたら負けるだけです。では聖書はどうか。先出しじゃんけんで書かれています。預言者の口を通して、これからこんなことが起きると、先に語ってしまう。もし語ったとおりのこと画起きなかったら、聖書のみことばは間違いということになり、捨てられるだけです。しかし、もし語ったとおりのことが起きたらどうですか。本物だと言うことになる。詩篇2篇のみことばが書かれたのはいつですか。十字架の出来事が起きる千年前です。千年前に神は先出しじゃんけんをしていた。詩篇だけではない。読み直してみると、旧約聖書のあらゆる箇所が主の苦しみとよみがえりを預言していた。そのようなことがわかってくると、もう聖書への確信は揺るがないものになります。

3) みことばを大胆に語らせてください

こうしてみことばの確かさを告白してから、29節で具体的な願いに移っていきます。「主よ。いま彼らのおびやかしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。」

ペテロとヨハネから、祭司たちがどのように脅迫したかを聞いたとき、だれもが一瞬不安になったはずですが、でも彼らは沈黙しようとしません。むしろ、みことばを大胆に語ることができるようにと祈っていきます。なぜそうするのでしょうか。

詩篇2篇1, 2節のみことばが十字架を預

言していて、事実そのとおりのことが起こったのですから、同じ詩篇2篇4節から6節のみことばも同じだということにはならないのでしょうか。そこにはこう書かれています。

「天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざけられる。ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。『しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。』」

神とそのひとり子キリストに逆らったとしても、彼らの最期は明かだと言っています。主を信じる者をどのように脅迫しようとも、たとえいのちを奪ったとしても、なにも恐れることはない。「わたしは、わたしの王を立てた。」キリストが私たちの王であると言われ、私たちはこの王の守りの中に迎えられています。いったい何を恐れる必要があるのか。いやもうなにも恐れるものがない。これが救いです。この救われた喜びを、口を閉じて他の人に伝えないでいられようか。いや、だれが止めようとも私は大胆に語りた。だから主よ。その力を与えてください。そう祈ったとき、場所が震え動き、人々は聖霊に満たされていきます。主は祈りを聞いてくださり、励まします。

3 罪人の手で聖書の確かさが証明される

皆さんもいろいろなことで恐れを覚えたり、うろたえることがあると思います。そのたびごとに「あなたは信仰がないのですか」と何度も問われます。初代教会の人たちはどうだったのでしょうか。彼らだって恐れたのです。怖いからこのような祈りをするのです。それでも聖書のみことばにすがりながら彼らは祈りました。

私たちもみことばにすがります。その聖書には、私たちがどのようにして救われるかが書かれています。けれども脅迫されたり、試練にあったりすると、救いが信じられなくなるかもしれない。そんなとき、私たちが何をしたかを思いだしていただきたい。聖書で預言されていたとおりに、私たちは神の御子を殺したのです。もし、してはならない罪を繰り返しているのならば、私たちは何をすることになるのか。口では信じられないと言いながら、いつぼうで私たちは自分の手で聖書に書かれているとおりのことをしている。聖書が真実であると自ら証明していることにならないですか。ローマ書に書いてあるとおりで、「神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。」（ローマ書 11 章 33 節）

このようなみことばが私たちを導きます。主のあわれみを覚えたいと思います。